

同サイズ) 90 径モジ網、1.5 cm 目 T.R 網、5 × 5 m 枠では、160 径モジ網 (4.3 × 4.3 × 3.5 m) 90 径モジ網 (4.3 × 4.3 × 3.5 m)、1 cm 目 T.R 網 (5 × 5 × 4.5 m) を魚の成長に応じて使用した。

生簀収容直後よりほぼ毎日潜水観察を行ない、適宜斃死魚の取り上げ、網掃除を実施した。

2 結果及び考察

飼育結果を表-9 に示す。また飼育期間中の水温は図-9 に、塩分濃度はマダイ中間育成試験と同様である。

前年度に比べ、ほぼ同数飼育の場合、若干の生存率の向上が認められたが依然低いレベルであった。

3 区では酸素欠乏と思われる大量斃死があり、6 区ではモジ網内部上層 1 m だけゴース布を縫い付けたが風波 (南風) によって破損し、モジ網とゴース布の間で大量斃死があった。これらの区を除いて各区比較してみると、やはり大型個体程生残率は良好で、マダイ同様 11 mm サイズ以上での沖出しが望ましいと思われた。

7 ~ 9 区を比較すると収容尾数の少ないもの程高い生産率となっており、収容密度は 5 ~ 6 万尾が適正と思われた。

9 区は沖出し直後より毎日潜水し斃死魚の取り上げ計数を行なったが、沖出し後 5 日間で約 14,000 尾の斃死があり、いずれの区も同様に沖出し後数日間の減耗が激しいものと思われた。この間の飼育技術の改良に努める必要があると思われる。

異形魚については、5 月 12 日に 4 区、10 区の放流時、肉眼によって調査した。両区混合で 88 尾調査したところ 64 尾に異状が認められ、その出現率は 72.7 % と非常に高い割合であった。異状の大半は吻部で特に下顎が短いか変形していると認められた。また、7 月 7 日に 7 区、8 区の放流時、同様な調査をしたところ 134 尾中 4 尾と非常に少なかった。

異形魚出現の原因については明確でないが餌料に問題があったのではないかと考えられた。4、10 区は 7、8 区に比べ魚肉ミンチ投与開始が遅かったことが異形魚の高出現率の 1 つの原因になったのではないかと考えられた。

魚病については、7 区でピバギナ症が発生し 6 月中旬より 100 ~ 200 尾の斃死が続いた。網掃除をひんばんに行ない斃死魚数は減少したが完治するには至らなかった。

表-9. ミナミクロダイ沖出し飼育結果

区 分	収 容		中間測定 (一部) 取り上げ				中間測定 (一部) 取り上げ			最 終 測 定 取 り 上 げ					
	月日	収容尾数 (尾)	平均尾叉 長 (mm)	月日	取り上げ 尾数 (尾)	生 残 率 (%)	平均尾叉 長 (mm)	月日	取り上げ 尾数(尾)	平均尾叉 長 (mm)	月日	取り上げ 尾数(尾)	総取り上 げ尾数(尾)	通算生残 率 (%)	平均尾叉 長 (mm)
1	3・9	15,000	10.6	4・10	1,500	10.0	—	生残尾数激減の ため1つの生簀 に収容	5・12	7,904	—	1.6	53.9		
2	3・11	15,000	11.7	"	3,400	22.7	—								
3	3・17	23,900	13.5	"	2,500	10.5	—								
4	"	44,980	"	"	8,300	18.5	—								
5	"	21,510	"	"	9,500	44.2	—	—	—	—	5・12	7,418	7,418	34.5	53.9
6	"	37,320	"	—	—	—	—	—	—	—	4・6	—	15,400	41.3	24.8
7	3・4	107,200	13.1	4・28	(11,900)	—	—	—	—	—	7・7	16,135	28,035	26.2	79.6
8	"	69,640	"	4・21	(8,000)	—	—	5・12	(7,500)	50.0	"	5,687	21,187	30.4	90.0
9	"	52,300	"	"	(12,000)	—	—	—	—	—	5・12	10,800	22,800	43.6	50.0